ISSN 0389-1984

# トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿２－１－１
新宿三井ビル37 F
Phone:03-3344-1701(代)
Fax:03-3342-6911
URL http://www.toyotafound.or.jp

No.96 July 2001

## 特集１　地域再生へ -「公共事業」を越えて

### 生命の水を次の世代に

大野の水を考える会　野田佳江

**●朝日環境賞のこと**

2001年4月25日、福井県大野の水を考える会は、第2回朝日新聞社の「明日への環境賞」を受賞した。1977年から四半世紀に及ぶ郷土の地下水保全運動に、初めて全国的な評価を頂き、湧き上がる感激を共有しようとリーダー8人は旅費を工面し式に参列した。

長い間、生命の水を守ろうとする「水の会」の運動は、地域のすべての人に好感をもって受け入れられてきたとは言い難い。台所の水をあずかる女性層には圧倒的に支持されてきたものの、地域の実権をにぎる政治家や経済界からは、水の会の運動は地域の経済発展を阻害するとか、行政からは国や県の補助金の妨げになるとして、当惑の混じった眼差しで眺められてきた。長年そんな思いに耐えて運動を続けてきた私たちは、今それが霧のように晴れていくように思え、心の底から湧き上がる喜びを抑えきれなかった。

朝日環境賞授賞式（左が著者）

昭和38年、記録的な大雪となった「38豪雪」

**●地下水のまち大野で井戸枯れ発生**

福井県大野市は北陸の山間にある人口4万人の城下町である。四方を1500m級の山に囲まれた盆地で、北陸の小京都といわれ、市内のいたるところに湧水が湧き、市民はその地下水を直接汲み上げて生活している。今も市街地を中心とする3万近い人々は各家庭に井戸を持ち、おいしい自然の地下水の恩恵を享受している。

こんな大野市の地下水に異変が生じたのは、1970年代(昭和40年)にはいってからである。北陸の豪雪地帯にある大野市は、「38豪雪」以降冬の雪対策に導入された地下水融雪によって、冬になると家庭の井戸が枯れて、主婦は「お米がとげない、赤ちゃんのオシメが洗えない」と嘆いた。人々は仕方なしに井戸を深く掘り直し、街中が井戸堀競争になった。市はこの状態を見て上水道計画を立て始めた。ちょうどその頃私は、「地下水対策手遅れの前に」と題して「ふつう夏に水が足りないと騒ぐのに、冬になると水がないと泣いている町がある。福井県大野市は…」と報じた地下水融雪の新聞記事に接した。私はこの記事から市の導入しようとする上水道政策では、大野の地下水問題は解決しないことを悟った。それから私の地下水研究と運動は始まった。1977年8月14日は私の水問題開眼の日であった。

CONTENTS

特集１　地域再生へ -「公共事業」を越えて　1
特集2　身体から見えてくる世界　5
「ＮＰＯの調査研究能力をどう高めるか」開催報告　9
2001年度研究助成申請状況　11

しかしいったん便利さを手に入れた人間は、極限状態に陥るまで環境破壊に対して鈍感である。融雪が地域の地下水収支バランスを崩している現況を熟視せず、大野の政治経済を支配している層は、節水や融雪の規制は時代の発展に背くとし、「上下水道整備こそ行政の責務」と強調し、地下水保全の道を探ろうとはしなかった。まもなく1980年、豪雪と異常寒波で市街地は千戸の井戸枯れに見舞われ、自然発生的な「いのちの水を守れ」との主婦の声が広がり、ついに「大野の地下水を守る会」が結成された。

水の会がまず着手したのは、市民の手による地下水融雪マップと、降雪と地下水位低下の因果関係を示す連動グラフの作成であった。この二つが市長の心を動かし、この年10月、福井県初の「地下水保全条例」が制定された。それから4、5年は平穏な冬を過ごせたが、「56豪雪」(昭和56年)を機に県は再び地下水融雪に走り、大野市は井戸枯れに泣く街に逆もどりした。

主婦運動の限界を感じた私は意を決し市議会議員となった。そして市民運動と議会の両面から、国や県も含めた行政に対し「地下水は市民の共有財産、飲み水最優先」を旗印に運動を進めていった。そんな私の前に立ちはだかったのは、生活感覚のない行政マンと議員であった。それらの人たちは「このおいしい地下水こそ、次の世代に引き継ぐ宝」という自然に対する畏敬の念を持たず、上下水道の整備こそ文化都市の水行政であると信じ、水がめに浮いたような大野盆地の地形を考慮せず、全国画一的な下水道工事を急ごうとした。

このありさまに愕然とした私は、大野の地下水政策に総合的判断を下せる助言者を探し求め、そして出会ったのが地下水学者としての信念を貫いた柴崎達雄博士であった。

**●専門家とトヨタ財団の助成で活発化する住民活動**

1985年、柴崎博士との出会いによって水の会は主婦運動を脱皮し、住民の手による地下水調査を武器に、市民への啓発、行政への提言活動に運動の主体を移していった。博士からはトヨタ財団の市民活動助成制度を知らされ早速応募した。数次にわたる助成を頂き、私たちは水質、河川、合併浄化槽等、さまざまな研究をすすめることで自己変革をとげ、外部からも大野の水の会の活動は「シロートサイエンス」と信用されるようになった。

この25年間を振り返り、もっともきびしかったのは、1990年のクリーニングによる地下水汚染と、その後引き続きおきた水源地への企業誘致である。住民9800人は訴訟も辞さず「いのちの水を守れ」と必死になって行政の横暴に抗議した。この時、全国の専門家や自治体関係者から頂いた助言や支援は、今も忘れることはできない。

その後、大野市民は草の根選挙で環境保全派市長を送り出し、ようやく軌道修正が始まった。ブナ林のナショナルトラストをはじめ、環境教育、地下水保全基金など環境政策は徐々に進展し、住民の水意識にも大きな変化が生じてきた。しかしながら建設業が生産人口の25%を占める地域経済は、従来の補助金行政から一挙に脱皮できず、市は危険な公共下水道に着手してしまった。1999年2月72歳になった私は、夫の介護のため議会を去る決心をした。市の水政策が揺らいでいる最中に議会を去ることは、うしろ髪を引かれる想いだったが一切を諦観し、あとは2人の女性議員と若い人達に託し私は後方支援に退いた。

**●新しい水の会の出発**

1999年5月、下水道財政の加藤英一氏の講演会を皮切りに、新しい水の会は動きだした。代表幹事会制で仕事を分担し、生命の水の復活に向かって学習と調査・対話・市民啓発に出発した。そして私の議会報告「あかね」に替わって新しい「大野の水情報」を発行し、行政を巻き込みながら運動を強化することにした。激しい対立抗争だけでは、運動は進展しないと若い人たちは判断したのである。今まで水の会と行政の間には「いのちの水を守ろう」とする私たちと、国や県の「上下水道推進主義」の根本的な対立があった。その根幹には、官僚や族議員の利権にゆがめられた日本の政治構造がある。そして自治体側も首長のリーダーシップ不足や、補助金行政から抜け出せない職員の体質、住民の他力本願が横たわっている。地域を生かすも殺すも、そこに住む住民と行政の覚悟次第である。

新しい体勢になって2年が経過した。リーダーは自らの研究調査と組織の拡大をはかり、動かなかった行政マンとの共通意識を高めようと、全力投球を続けている。先日も更新期限の迫った真名川の水利権問題に対して、各戸にチラシ広告を入れ、大量の水が吸い込まれていく発電所の現場調査を、行政・住民を巻き込みながら施工した。

**公共下水道工事の現場で**

**●公共下水道工事の一時停止を提言**

私が議会を去る直前、大野市は旧政治勢力に押され、ついに地下水破壊と財政破綻の公共下水道工事に着手してしまった。いったん工事に着手すると、その中止は非常に困難になる。このため議会在籍当時から事業計画段階で方向修正させなければと、必死の思いで努力してきたが、力不足と理事者の認識不足や情報かくしで、タイムリミットの悲哀を重ねた。

はたして終末処理場の工事が開始されるや、現場では毎秒0.4t、目のくらむような大量出水が始まった。下水管埋設も作業がすすむにつれて、計画の無謀さが露呈され市庁内でも動揺し始めた。下水道本管の埋設は、こともあろうに大野盆地の地下水の集まる地点を通るもので、1985年以来の水の会の調査では地下水位60㎝～1.5m前後のところから工事は始まった。そんな所を7mも掘り下げて本管を埋設したのだから、下水管への地下水進入は防げない。水の会では市下水道課に申し入れ、9人が下水管へもぐって現場検証をしたが、管の継ぎ目の色が変わり、地下水浸入の危険を感ずるところが何箇所も発見された。

最初から市民を抜きにし、議会の水行政委員会まで廃止して、一部行政マンとコンサルタント密着でことを急いだ結果の恐ろしさを痛感する。水の会では工事を一時ストップし、もう一度大野の地下水環境や財政に見合った排水計画に立て直すよう提言した。

2000年10月、国は建設、農水、厚生の三省合同の通達で、地方自治体に対しこれまでの下水道政策見直しを求めてきた。水の会は自ら合併浄化槽を設置しその実験結果から、「農村は合併浄化槽、市街地はコミプラ方式（コミュニティー・プラント大型合併浄化槽）」を提言、その方が一戸当り200万円と公共下水道の1/4のコストで済み、地下水破壊も回避できると提言したが、理事者は耳を貸さなかった。

しかしこの水の会の研究で排水処理にたいする市民の意識が高まり、最近では合併浄化槽と農業集落排水とのコスト比較が提案されて、効率の悪い公共事業のチェックがはじまった。

**●水意識の変化と次の世代への働きかけ**

水の会の活動記録『よみがえれ生命の水』が出版されてから、大野の水意識は確実に変化している。今までタダの地下水に甘えていた企業から地下水保全基金に1000万円寄付され、水の会が20年来主張してきた水のコスト負担に新しい道が開かれた。私たち会員はメーターをつけ地下水の使用量を計り、このほど上水道料金の1/3、18万余円を寄付した。

学校教育でも盛んに地下水問題が取り上げられている。先日も中学生に「皆さんが75歳の私の年になるまで、いまのおいし水を飲みたかったら、上水道や下水道さえつければよいと考えていたら、大野の水は確実に死にます」と施設中心主義の危険を説き、節水や雨水利用の水循環、汚染防止こそ水を守る基本だと強調した。「都会では1リットル200円で売られるミネラルウォーターを、大野ではトイレにザアザア流しているが、1回流すと2000円よね」と現代っ子の金銭感覚に訴えたところ、笑いとも驚愕ともつかぬどよめきが返ってきた。

今の中学生の親の世代は私たちが戦後の混乱期のなかで、便利さ第一、経済中心主義で育ててきた。孫の世代がおかしくなって不思議はない。その懺悔から私の21世紀は出発したい。

## 韓国　始華湖（シファ湖）を訪ねて

### ―「水質の再生」はできたが、新たなる壁が―
### 「干潟の再生か」それとも「干拓事業の推進か」

**トヨタ財団総務部長　星野末男**

4月某日の夕刻16時、今年3月末に開港したばかりの仁川（インチョン）新国際空港に到着しました。開港して間もないせいか、ソウル都心部への交通アクセス方法が私のような海外からの訪問者には、わかりづらいものでした。空港内での案内表記は韓国語（ハングル文字）が主で、英語表記はきわめて少ないこともわかりづらい要因の一つだったのかもしれません。

空港内で45分ほど迷ってしまいましたが、なんとか空港から約1時間でソウル市内のホテルへ到着することができました。

翌朝、ホテルを出発しソウルの南西約50㎞、車で約1時間の安山市にある「韓国海洋研究所」を訪れました。今回の始華湖への訪問にあたり、案内・説明をお願いしていた主任研究員である諸淙吉（ジェ・ジョンギル）氏とお会いするためでした。

今回私が韓国の始華湖を訪問しようと思い立ったのは以下の経緯です。トヨタ財団は従来から日本の干潟問題に関しての活動に大いに関心を持ち、支援をしてきました。また、本年度は日本と韓国との共同での「韓国の干潟調査活動」にも支援を計画しております。

さらに、本年初め、日本のある民放テレビ局が報道番組の中で始華湖を取材した番組を放送しました。「水門を解放した

結果、水質が元に戻りつつある…」との主旨だったと記憶しています。私は、この放送を見て「是非とも直接自分の目で、始華湖を見てみたい」と感じました。上述の諸淙吉氏は、この民放テレビ局の取材陣を受け入れた方でもあります。

始華湖を見て回りまず驚かされたことは、その広大さでした。日本の諫早湾の5倍近い広さとのこと。地図上A地点からB地点までが、始興市と大阜島とを結ぶ道路（上下各一車線）でもある堤防の長さは約13㎞と諫早湾の潮受け堤防より5㎞以上も長い。

そして、大阜島側の取り付け部分に水門があります。水門は8基あわせて長さわずか約80m。諫早湾の南北2ヵ所の合計250mに比べると約3分の1と非常に短い（狭い）。

そもそも、始華地区の開発事業（土地造成および淡水化計画）は、1986年に計画が決定され、翌1987年工事に着工。1994年1月に「閉め切り堤防」が完成。土地造成は、工業用約4,000haが完成しましたが、残る農業用は未着工の状態です。

始華湖の水門開放は、水質悪化に耐えられなくなった行政側が地元の反対を押し切り断行しました。

それまで、工業地帯および農業地帯からの工業排水・生活排水・畜産排水の流入で汚染が進み、湖内の水位が一定値を超えると、水門を開け腐敗した水を外海へ放流してきました。1996年のテレビ放送をきっかけに「汚水放流反対」の声が広がり、翌1997年7月水資源公社は、水質浄化のために試験的に海水を導入しました。そして、今年1月、正式に「淡水化を断念」しました。ただし、水門は常時の開放ではなく、始華湖内の水位を外海よりもマイナス1mに維持するようコントロールするために開閉を繰り返しています。

ちなみに、水質を評価するデータの一つである「化学的酸素要求量（COD）」の推移はグラフのとおりですが、1997年が最も悪化しており、試験的ではあるが水門を開放した後から2000年にかけて目に見えて水質が改善されており、堤防閉め切り前の状態に近づきつつあります。

また、始華湖内には多くの水鳥が戻ってきました。これは、水質の改善に伴い、水鳥の餌となる「生物の回復」をも意味しています。

しかし、水位をマイナス1mに維持するために水門を開閉している限りは、始華湖内の干潟を元通りに再生することはきわめて困難ではないでしょうか。

現在、始華湖の開発については上述の諸淙吉氏と民間のＮＧＯが中心となり「エコ・パーク（Eco-Park）構想」が推進されています。行政側も「当初の開発構想」を全く断念したわけではなく、実際には「エコ・パーク（Eco-Park）構想」と「行政側の開発構想」との折衷案を模索しながら推進されています。

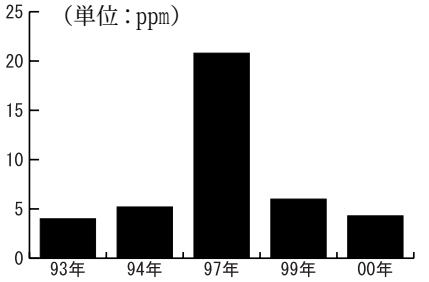
「エコ・パーク（Eco-Park）構想」の主なポイントは、以下のとおりです。

1. 国内・外からの観光客が、散歩し・休息し、あるいは野鳥を観察できる広大な自然公園
2. 観光客が、多くの野生生物を観察できる保護地区
3. 恐竜博物館、水族館
4. 首都ソウルと同様な生活水準で、経済的にも自立した150万人規模のコミュニティー
5. 環境・マリンスポーツ産業の中心地
6. 歴史的・文化的な遺産を保存する伝統的な漁村
7. 海洋環境・環境教育・沿岸湿地帯についての学習できる研究センター

今回、韓国始華湖の訪問は、5、6時間というごく短いものでしたが、私は一面的かもしれませんが「自然の偉大さ」と、また「いったん壊されてしまった自然を再生することの難しさ」を痛切に実感できました。

また、置かれた環境・背景等状況は大いに異なるものの、「日本の干潟を考える」うえでも、大いに参考とすべき、また、学ぶべき多くのことが身近な隣国（韓国）にあることを改めて認識させられました。

**化学的酸素要求量（COD）推移グラフ**




**始華湖周辺図**

## 特集２　身体から見えてくる世界

# 「見る」- 盲僧が教えてくれたこと

福岡女子短期大学非常勤講師　永井彰子

暗闇の中から突然人影があらわれたかと思うと、ゆっくりとこちらへ歩いてくる。街灯の下にさしかかると、手にした白い杖が目に入った。盲僧のR師にちがいない。冬の早朝、まだあたりは人通りもなく、遠くに見える市場に人が出入りしているだけだ。

私が初めて韓国を訪れたのは1988年のことである。その後、トヨタ財団の研究助成を受け、読経と占卜に携わる盲僧を訪ねて各地を歩いてきた。韓国には『高麗史』に登場する盲僧をはじめとして一連の盲人宗教者の系譜がある。彼らは命課盲人、盲覡、判数（パンス）、盲人読経師など、さまざまに呼ばれてきたが、現在では大韓盲人易理学会という全国的組織をつくっている。ソウルから始まった今回の旅は、全羅北道全州市の大韓盲人易理学会員、R師にインタビューするのが目的であった。朝の散歩の途中ならば応じてもよいという約束をとりつけ、仁荷大学校の正門前で待ち合わせることにしていたのである。

R師は初対面の挨拶を交わす間も惜しむかのように、また暗闇の中を歩き出す。R師は杖を手に慣れた足つきで先歩いて行く。同行した仁荷大学校の女子学生、金さんと私はそのあとをついて行くほかはない。どの方角へ向かっているのか見当もつかないが、R師に案内されてどのくらい歩いただろう、小高い丘の上の展望台に着いた。

夜明けが近くなって周囲の山並みのシルエットが浮かび上がった。例えようもない美しさである。透き通った朝の冷気と鳥たちのさえずりの中で、新しい一日の始まるのが全身で感じられる。R師は失明する以前からこの展望台へよく上ってきたそうだ。夜明けの景色に見入っているR師のかたわらで、黙ったまま、私たちも空の色が染まってゆくのを眺めていた。もちろん、R師にはこの山の景色は視覚的には見えていない。結局、その日は夜遅くまでR師と行動をともにするという思いがけない成り行きとなった。

R師は48歳、生まれてこのかた、そのほとんどを全州市とその近郊で暮らしてきた。工業高校を卒業して土木工事会社で働いていたが、21歳の時、道路工事をめぐるトラブルに巻き込まれて集団暴行を受け、その時の打撲傷がもとで失明した。しばらくは心身の痛手から立ち直ることができなかった。やがて母に連れられ、修行の場を求めて各地の寺を探し歩いた。ようやく全州市近郊の山の中腹にあった成仏寺に入ることを許される。3年間、自炊生活を送りながらひたすら健康の回復につとめたという。

当時の成仏寺は、ムーダン（巫堂）たちが山神をまつる巫俗宗教の小さな庵であった。そこには盲僧のP師もいて、読経と占卜をなりわいとしていた。精神的にも次第に安定してきたので、P師から一対一で周易などを口伝えで教わり、占卜業の手ほどきを受けた。また、さまざまな民間信仰の経文を覚えて、ついにP師の仕事を引き継ぐことになる。さらに点字の技術を身に付け、本格的に仏教の経文を勉強した。

1970年代になると、迷信を追放しようとする政府のセマウル運動（新しい村づくり）が盛んになり、成仏寺もその影響を受けるが、太古宗の仏教寺院となることで廃絶を免れた。剃髪こそしていないが、R師も僧侶として「道岩」という法号をもらっている。

韓国では、心身の休養や勉学のために、こうした山の寺や庵にこもる一般の人びとが多いと聞いていたので、私は成仏寺を訪ねてみたいと申し出た。成仏寺へはタクシーで市内を出て30分、そのあとは3、40分の山道を登って行くしかない。遅れがちな私たちを待つかのように足を止めることもあるが、歩くスピードは終始変わらず、確かな足どりだ。成仏寺で生活を始めてから、この山道を数え切れないほど往復したことだろう。先に立って案内するR師の目が見えないなんて、どうしても信じられない。彼

韓国全州市近郊の山中にある成仏寺

の頭のなかには「目に見えない地図」ができあがっているとしかいいようがないのである。

視覚的には見えていなくとも、流れる風やその匂い、鳥や虫の鳴き声、樹木や草がそよぐ音、足を伝わってくる石まじりの土の感触などを聴覚や触覚、嗅覚をフルに働かせて「見ている」のではないだろうか。そしてその情報をもとに空間を把握し、「目に見えない地図」が作られているのではないだろうか。それは経験する手段こそ異なるが、私たちが目にする地図と同じような、あるいはもっと綿密なものかも知れないのだ。とすれば、R師が「見えない」などとはとてもいえなくなってしまうだろう。

現在のR師は市内の商店街の一画にある事務所兼住居に一人で住んでいる。一間だけの簡素な住まいだが、電話や営業用の点字の書籍が整然とならんでいる。最近、R師が韓国の視覚障害者団体の一員として日本を訪問した際の印象を語ってくれた。東京では高田馬場の日本点字図書館を見学したり、浅草に案内されて初めて「天丼」を味わったり、日本の視覚障害者団体と交歓の機会をもったという。また、実際に東京の町を歩き、電車やバスに乗ってみて、日本の行政の視覚障害者に対する政策や障害者がおかれた状況を知ることもできた。日本と比較して韓国では障害者対策が十分でなく、まったく恵まれていないというのが参加者の多くの意見であったが、彼はそうは思わない。日本のような優遇された状態が続くと障害者たちは積極的に自活する意欲を失い、困難のなかで自分自身で達成したという満足感が薄れるのではないか、というのがR師の感想であった。

今ではR師は週末だけ盲僧として読経と占卜に携わり、残りの時間を盲人福祉連合センターで行う失明者へのカウンセリングの仕事にあてている。それは同じ視覚障害をもつ者同士として、悩みや苦しみに耳を傾けることで少しでも助けになればと思って始めたことだという。話を聞きながらふと気がつくと、あたりはすでに夕暮れ、メモを取る手許もはっきりしなくなった。仕方なくR師に明かりをつけてもらう。日頃、闇のない生活に馴れた者はこういうとき、手も足も出ない。

今日一日のしめくくりは遅い夕食の席であった。「全州へ来たら何といってもピビンパ（混ぜ御飯）でしょう」と、ここでも先導するのはやはりR師だ。テーブルの上にピビンパのほか、何種類ものキムチや珍味がずらりとならぶのが韓国流である。浅草で「天丼」を前にした時、いろいろならぶのかと思ったら、出てきたのはたくあん二切れだけだった、と楽しそうに日本の思い出を語った。

最後に私の年齢について質問が出た。「あててみて下さい」というと、「50代後半でしょう」という。やはり声はすべてを語るのかと、R師の前では何でも見通されてしまうような錯覚におちいる。すっかりリラックスして食事を終えると、家まで送るといっても耳を貸さないので、店の前で握手して別れた。しばらく見送ったが、その姿はやがて暗闇にまぎれて見えなくなってしまった。

ところで、R師の「目に見えない地図」についてだが、私が想像したことはまったくの的はずれではなかったようだ。それを知ったのは、三宮麻由子さんのエッセイ集『鳥が教えてくれた空』（日本放送出版協会）に出会ってからである。

著者である三宮さんは4歳の時失明したが、探鳥を通して自然とめぐり会い、豊かに感性の世界を広げていった方である。彼女は鳥の声を聞き分けるうちに、それらの声が立体的に伝えてくれる景色を把握するようになり、やがて植物のたてる音や虫の声によって自然の時間を感じ、音から景色が見えるようになったのだという。しかし、そうなるためにはすべての五感を一挙に開く必要がある。盲人だから耳がよいといった単純な原理でなく、五感が景色をキャッチできるまでになるには、階段を一段ずつ上っていかなければならなかった、と書き記している。

このような三宮さんの体験は、「見る」とはどのようなことかを改めて考えるきっかけを与えてくれる。確かに、「見る」というのは、目によって事物の存在や動きを認識すること、すなわち眼球を通して網膜の視細胞が受けた刺激が大脳皮質に伝わることにほかならない。しかしR師や三宮さんが空間を把握する際は、私たちのように目という視覚器官だけが引き受けるのではない。残された身体感覚のすべてを活用して情報を得ようとする。その個々の情報を統合して空間を形づくり、それを把握するのである。たゆみなくエネルギーを費やして一つずつ獲得してゆくのは根気がいることだが、それだけ身体は深く「見よう」とするだろう。こうたどると、「見る」という体験が本来、身体性と深く結び付いていることに思い至る。そして「見る」ということは、これまでの通念をとびこえて、豊かなふくらみを持つものとなってくるのである。

かつて日本や韓国では、盲僧は「見えない」ことによって何か神秘的な力が与えられ、未来を見通す力を持つのではないかと信じられていた。これは「見えない」ことを否定的に捉えるのではなく、かえって積極的な意味を与えようというもので、「見えない」からこそ隠された身体感覚が解放され、特別な能力が引き出されるのを期待したのだ、と現代風に読み解くこともできよう。

ふりかえれば、盲僧を訪ねる私をいつも

先導してくれたのは、ほかならぬ盲僧自身であった。私は多くの盲僧にめぐり会い、導かれるままに歩いてきた。私の目は見えてはいるが、はたして本当に世界を見ているのだろうか。いま、そんなことを考えている。

盲僧のR氏

# 台北 - ある刺青師の親子

昭和女子大学国際文化研究所客員研究員
台湾中央研究院民族学研究所訪問学員
山本　芳美

東京から飛行機に乗り、南へ3時間。台湾北部の大都市、台北は263万人の人口を擁し、世界でも人口密度の高い都市として知られる。人でひしめく台北の、さらにその一角のある街は、若者で一日中溢れていて、夕刻からはさらに人波が増す。夕刻さらに増した人波を抜け、私はとある雑居ビルの階段を上がっていく。

2階は外の喧騒から遠く静まり返っている。ビルの1階には人の出入りもあるが、2階は若者とは無縁のドレス屋が集まる。どの店にも原色の生地にスパンコールを刺繍したドレスが並ぶ。ドレスはこの街の歌手向けというが、客を見かけることはまずない。人が袖を通さぬドレスは、日が差し込むことのない通路を照らす蛍光灯の下で寒々として見え、胸を締めつける。

私がいつも訪ねるA氏の店と隣の店だけが、同じ階の他の店とは違う商いをしている。A氏は刺青師で、隣は香水屋である。香水屋は店開きしたばかりだが、すでに風景に溶け込んでいた。それは、A氏の向かいのドレス屋が一役買っていた。ドレス屋の主人は、夜は歌手として働く。時々テープにあわせてフンフンと口ずさみ、1日に2、3曲のステージのために、プレスされたワイシャツに黒いスラックス姿で出かけていく。気のいい主人は同じく歌手をする恋人と姉、友人と経営するドレス屋の店の前にテーブルと椅子を置き、人々が思い思いに立ち寄れるようにしている。このため、私はA氏だけでなく、ここの人々とも親しくなっていった。

A氏は時たま店を出て、このテーブルで休息する。ある時、A氏と私がここで歓談していると白地に赤いバラのタンクトップ、黒のホットパンツ、茶パツの巻き毛という姿の女が黒ジャケットの男と、このドレス屋を訪れた。細身の彼女の左肩には、10㎝四方のべっとりとした黒い刺青があり、右手の手首から親指にかけては細身の龍が踊る。タバコを吸いかけていたA氏に「見た？」というと、「ああ」とうなずきタバコを吸いかけていた手を止めたまま、A氏は「台湾人は、神経病だよ」とつぶやいた。

「手に彫ってて変だろ」。

「ええ。どこで入れたと思います？」。

「どっかだろ。最近の奴らは、2、3週間勉強しただけで彫師になりやがる。手なんかに入れたら、時間がかかるだけでキタナイだけだ。肩に入れるのがいいんだ」。

「さっきの男の子、18歳って言ってたけど、肩に狼入れて、その脇にカノジョの名前入れてたわ。どう思う？」。

「だから神経病だ。頭オカシイよ」。

「ざっと数えて、Aさんのところには一日に3、4人の客が来るでしょ。一年を通せばだいたい600人ぐらい？」。

「いや、1000人だ」。

「台湾の人で刺青をしている人、日本人より多いんじゃない？」。

「だから、台湾人は神経病なんだよ」。

と話す間に、真紅のドレスを試着し終えた女は店を出て行った。

刺青屋をして22年のA氏によれば、以前、この街では彼しか刺青師はいなかったという。しかし、今はおよそ300m四方に5店あり、競争は激しくなった。客の中心は10代後半から20代の男女である。A氏が「神経病」とつぶやくほど、客はさまざまな注文を繰り出す。手首近くにタバコのバーコードを彫って欲しいという20代前半の男性がいた。A氏が自分のタバコの箱を見せると、フランスの「この銘柄のタバコしかダメだ」、とこだわり、15分ほどで彫り上げて帰って行った。恋人と訪れた30代の女性が、「阿象」という恋人の愛称にちなんで、小さな象を左の上腕に彫ったのも見た。

私がA氏を知ったのは東京であった。東京で昨秋、刺青のイベントが開催された。そのとき台北から参加したのがA氏であった。私もイベントのため一時帰国し、その

後A氏と台北で再会を果たした。以来、私は時間を見つけては、午後から深夜にかけて開くA氏の店に入り浸るようになった。刺青のフラッシュ（下絵）に囲まれた、A氏の店に通うのは楽しい。というのは、刺青師がどのように仕事をするのかを間近に見ることができたからである。私はここで、刺青師の仕事が、彫る作業はその一部にすぎないことを知った。虎や牡丹、鳥などの画集を参考に下絵を描きあげ、名人といわれる刺青師の写真集を見て、ぼかしや陰影の付け方、色使いを研究する。タトゥーマシンを自作し、針の調整をする。客1人彫り上げるたびに使用した器具を消毒し、器具にかけてあるビニールを交換する。そして、刺青を彫る時に用いる革張りの椅子を薬用アルコールで拭き上げる。この時期にA氏は、「勉強が苦手な」17歳の息子を後継者として仕込んでおり、修行を一から目にすることができた。

A氏は、40代後半。昔、勉強したそうで、日本語が少し話せる。私の北京語が上達するに従い、会話は北京語に切り替わった。A氏が他に話すのは、中国大陸の福建地方に由来し、台湾の人々の3/4が母語とする閩南（ビンナン）語である。普段は、Tシャツにインクのシミがついたジーパン姿。皮ジャンやアーミーパンツの時もあったが、どっしりとした体型と人のよさそうな顔のため、世間に流布する「カッコいい刺青師」というイメージからはほど遠い。瞳がくりっとして少年の面立ちを残した息子とは、五分刈りの髪型だけが似る。A氏の両足には、正面を向いて牙をむく緑の龍がいる。何もないように見える左腕にも、特殊インクを用いて自ら彫った龍が巻きついている。ブラックライトに照らされると、龍は蛍光色に輝く。あとは、背中の鷲と虎である。刑務所時代に彫ってもらったというが、鷲と虎はのっぺりと大きく青く、A氏は気に入らないらしい。

A氏が刺青を知ったのは、刑務所であった。18歳の時、ケンカをして刑務所に3年入るハメになった。刑務所の中で彫師が彫る姿を見て、面白い仕事だと思ったという。それで、自分も隠れて刺青を入れてもらったそうだが、看守に見つかると殴られたというのだから、「どうやって彫ったのだろう」と私はいぶかしく思う。刑務所を出てから、A氏は刺青の技術を独学で身に付けた。

ある日の夕刻「こんばんは」と店に入っていくと、A氏は不機嫌だった。「今、息子を怒鳴ったところだ。B屋で夕飯を買って来いといったら、適当に買ってきやがった。怒ったら、弁当を放り投げて出て行った」。客を彫る手を動かしながら、A氏が話す。20代前半の男性客の傍らでは、その恋人が心細げに見守っている。「日本のセンセイは怖いぞ。弟子がそんなことをしたら『バカヤロウ』と怒鳴って引っぱたく。あいつは親のところにいるのに、何だ」。

私はA氏の手元が狂わないうちに退散し、隣の香水屋に向かう。40代の女主人とその妹が夕食中だ。勧められてテーブルにつくと、「今、来たところ？」と聞かれる。「ええ」というと、「さっき、凄かったのよ。怒鳴っちゃって。でね、息子が出て行ったのよ」。私は、この人たちに刺青をどう思うか聞いてみようと思い立つ。2人は顔を見合わせて「あれ、痛いでしょ。私は痛いのは嫌。それに取れないでしょう。あなた、入っているの？」。苦手なこの話を逸らすため、私は「ヒミツ」といい、「なぜ、台湾の女の人は腋毛を剃らないの？」と話題を変える。

先日も、息子は半月ほど店に寄り付かなかった。修行に身を入れないのでA氏が叱りつけると、「別の仕事を探しに行く」と飛び出したのだ。私は心配したが、このビルの上層にA氏は住んでおり、別の階に息子の部屋があって何とはなしに様子をつかんでいることを知った。この息子の「家出」2日目に、私はたまたまA氏を訪ねた。並んで話していると、息子がフッと店の前を通り過ぎる。顔を見合わせたが、息子は店には入って来なかった。その翌々日、「風邪を引いた」と憔悴気味のA氏に「あの時、引き止めればよかった」というと、「金がなくなったら、帰って来るさ」といった。しかし、息子はしばらく戻らなかった。それからほぼ1ヵ月がすぎたばかりである。

A氏が息子に課したのは、紙に細い黒ペンで見本の絵を描き、それを一つひとつ点で埋める作業であった。A氏やA氏

**背中に刺青を入れた女性（台北での刺青のイベントにて）**

が「刑務所で見た」という彫り方は、日本の手法と異なり、ペンを持つように針を持つ。タトゥーマシン導入前も、その彫り方に合った細く短い柄に数本の短針を糸でくくりつけた用具を用いていた。作業は皮膚に彫る練習と同時に、濃淡を均一にする方法とぼかしの手法を学ぶことになるのだろう。練習する図柄も、墨一色から花など彩色が必要なものへ、最終的には虎など、より高度な技術が必要とされる図柄へと徐々に描ける図柄の種類を増やす。合間には市場で豚の皮を買ってきて、人肌に彫る練習をする。A氏は「修行には若ければ、若いほどいい」といったが、およそ2、3年はかかる修行に、遊び盛りの少年が耐えられるだろうか。

息子が出て行ったあと頃合いを見計らって店に戻ると、A氏は少し落ち着いて見えた。「あんた、仕事を覚えないか。あんたならうちの子よりできそうだから、早く覚えて面倒みてやってくれよ」という。「うーん、だって私、絵が描けないもの」と答えると、「大丈夫。真面目にやれば1年ぐらいでなんとかなるよ。それに道具を揃えたって、1万元（邦貨で、4万円相当）だよ」。

その間、A氏の弟子で経理をみている若い女性が「戻って来なさい」と息子の部屋に電話をかけていた。何度目かの電話に息子は上の階の部屋から降りて来て金をもらい、私に「元気？」と声をかけ、再び弁当を買いに行った。息子が店の外に出ると、向かいの店の主人がそっと肩を抱きかかえ、何事か話しかける。

10時をまわって、皆が遅い夕食をとっていると、今日、最後の客が来た。刺青をするのは初めてという20代の男性客は、見本帳を見て図柄を選び始めた。見本帳は、日本や欧米で出版されたものである。見本帳には、物語性をもった日本の図柄や迫力ある欧米の図柄、南太平洋の島々や北米、東南アジアの先住民が施していた文様、それらにアレンジを加えたトライバルと総称される図柄が雑多に混ざる。小さな店の壁にも、装飾と見本をかねて刺青の下絵がびっしり並ぶ。入って来た客が一番先に目に留める正面の壁には、A氏が自ら描いた下絵と「作品」の写真が額に入れて掛けられている。

息子は食事を中途にして立ち上がり、来客への仕事の準備をした。A氏は傍らで見守っている。私もA氏にビンロウの噛み方を教わりながら、脇に立つ。息子は見本の図柄をトレースし、客の右腕に薄く残る傷跡の上に下絵を転写した。医療用手袋をつけてタトゥーマシンと針の調整をし、波をかき分けて泳ぐイルカを彫り上げていく。A氏は線彫りする息子に「もっと、ゆっくり」と指示を出した。一段落した時、客はイルカで覆い切れなかった傷跡を隠すため、波を増やすよう注文した。私は彼の技量を危ぶんだが、下絵のない皮膚に息子は丁寧に波を描いていく。

見本帳を一つひとつ確かめながら彫る息子の手つきは、まだ拙い。しかし、少年の瞳は確かに以前よりしっかりと人の肌を見据えている。穏やかな表情になったA氏は、仕上がった刺青を日本語で一言「キレイ」とほめた。

11時を過ぎたので、私は客と一緒に店を出た。客は夜の闇へ瞬く間に消え、私も人が途絶えた街を抜け、家路についた。

## 「ＮＰＯの調査研究能力をどう高めるか ―米国と日本の事例から」開催報告

日本ＮＰＯセンター研究スタッフ　治田友香

去る3月27日と29日に、標記のシンポジウムを東京アメリカン・センターと名古屋アメリカン・センターで実施した（主催：日本ＮＰＯセンター、市民フォーラム21・ＮＰＯセンター、他。共催：米国大使館、トヨタ財団）。午前は米国側から、午後は日本側から報告をいただき、それを受けて参加者間で意見交換するという日程で、ラウンドテーブル形式で行った。東京では午前の部のみ公開としたため約80名が参加し、それ以外は日本ＮＰＯセンター、トヨタ財団および米国大使館の関係者を中心に、調査研究や政策提言活動を行っている市民活動団体、財団、企業の社会貢献担当者、シンクタンクおよび大学関係者など約20名に参加いただいた。

近年、さまざまな市民活動の現場で、適切な政策提言に向けたより専門的な調査研究活動への関心が高まりつつある。これに伴い、調査研究の目的が本当に市民の視点に立ったものとなっているか、それらの成果が地域社会に還元されているかなどの課題も浮かびつつある。このシンポジウムは、単に米国の事例紹介をするだけでなく、日本の状況も合わせて知ることによって、互いの共通点や相違点を確認し、今後の課題について話し合うことを目的とした。

### ●米国の取り組み-アスペン研究所とOMBウォッチ

米国側報告者の一人であるアラン・アブランソンさんは、アスペン研究所（注）の「非営利セクターとフィランソロピープログラム」のディレクターである。このプログラムに属する「非営利セクター研究基金」は1991年にＮＰＯに関する調査研究の促進のために設置され、これまでに300件の研究に対して総額700万ドルの助成を

行ってきた。

アブランソンさんは、まず、米国でのＮＰＯに関連した研究活動の概況に触れ、ＮＰＯ研究には専門分野ごとに行われる研究と分野を越えるセクター全体の研究があり、基金は特に後者への助成に力を注いでいることを説明した。基金の使命は、より実用的な研究を達成するために、研究者とＮＰＯのリーダーなどの実践者との協力的な関係をつくりあげることにあるが、実際には協力体制を組むことは難しい。そこで、両者の共同作業を促進するために、研究者と実践者がともに研究プロジェクトを選定し、趣旨を確認し、手法の決定をし、成果をもって行動に移すという「応用研究モデル」を、97年に基金の申請ガイドラインに導入した。その結果、両者が互いの強みを発揮し、成果を出しつつあるとのことである。

次に、OMBウォッチのギャリィ・バスさんが米国における公共政策研究について報告した。ホワイトハウス行政予算局（Office of Management and Budget）を監視するために83年設立されたＮＰＯで、バスさんはこの団体の創設者であり、現在エグゼクティブ・ディレクターである。政府に対するアカウンタビリティおよび政策過程における市民参加の促進に取り組み、ＮＰＯに関する調査研究と政策提言活動を行っている。

バスさんは、OMBウォッチがこれまでに行ってきた研究事例を交えながら、政策研究を次の4つのタイプに分けて解説した。1.応用研究（大学やシンクタンク等で行われる伝統的な研究方法によるもの）2.政策分析（法律や規制を要約分析して理解しやすい形で伝える）3.インパクト分析（ＮＰＯに関する法律や規制がどのような影響を与えるか。代替案がどのような影響を持ち得るか）4.アクションリサーチ（アカデミックな研究とは対照的に、すぐに次の行動に結びつけたり、政策提言につながることを目的に行うもの）。加えて、これらの研究結果の活用に関しては、それを利用すると想定される人（例：ＮＰＯ関係者、研究者、マスコミなど）に合わせて結果を記述することも大切なポイントであると指摘した。

**発表の風景**

**●日本側の取り組み - トヨタ財団市民社会プログラムを例に**

一方、日本側の報告は、まず、トヨタ財団の渡辺元プログラムオフィサーが市民活動助成と市民社会プロジェクト助成について概説した。1984年から開始された市民社会プログラムを、89年までを試行・模索期、現在のような公募形式をとるようになった90～95年を定着期、さらに公募による新規助成、非公募による計画型助成の二つのスタイルを採用するようになった96年以降を展開期として、これまでの経緯を応募件数、助成に至ったテーマ・組織形態などの面から分析した。そして、民間財団の助成の意義として、政府による補助金制度の対象になっていない、もしくは対象になりにくい活動を率先して応援していくことであるとした。

次に、同財団の市民活動助成を受けた団体から、それぞれの助成プロジェクトを中心に調査研究と政策提言のあり方等について報告いただいた。東京会議では戒能民江さん（シェルター・DV（ドメスティック・バイオレンス）問題調査研究会議）と川上園子さん（日本インドネシアＮＧＯネットワーク）から、名古屋会議では脇義重さん（九州・琉球湿地ネットワーク）と傘木宏夫さん（〔財〕公害地域再生センター）から、話題提供していただいた。東京では、DV防止法の制定や外国人研修制度の問題提起につながった研究活動、名古屋では干潟保全・回復の活動が韓国との共同調査に至った過程、また公害訴訟の和解金を基金に設立された財団が被害者・住民・行政・大学関係者と連携をとりながら調査研究事業を展開してきた過程について報告され、ＮＰＯが行ってきた調査研究活動の実態が具体的な事例を通して明らかになった。

それぞれの事例に関する米国側報告者や参加者のコメントから、ＮＰＯと政府、企業、時には議員との関係性のあり方、ＮＰＯの存在意義や社会的役割を理解してもらうためにＮＰＯは何をすべきか、調査研究や政策提言活動を行うにあたってその意味を地域住民にどうやって理解してもらうかなど、解決すべき課題がいくつかの点において共通していることが確認できた。

**●今後に向けて**

今回のシンポジウムでは、日本のＮＰＯ関係者が行った研究結果が法律制定につながるなどの影響力をもち、一定の成果をあげている現況を垣間見ることができた。しかしながら、資金調達方法や支援体制のあり方、人材の確保、ＮＰＯ間のネットワーク、ＮＰＯの実務者と研究者との共同など、ＮＰＯに関する調査研究の優位性や問題点の抽出にとどまり、研究を進めていく上での効果的な手法までは言及できなかった。

今回の反省点を踏まえて、引き続き分野を越えたＮＰＯが意見交換する機会をも

ち、ＮＰＯがいかに公共政策に関わるか、市民の関心度をいかにあげるか、研究成果の認知度を高めるにはどうするか、具体的な調査手法、インターネットやマスコミの活用のあり方などについて議論を重ねていけたらと思う。

(注)アスペン研究所　指導者層のリーダーシップ能力の向上を目指して1950年に設立された機関。本部はワシントンDCにある。

〈参考ホームページ〉

アスペン研究所非営利セクター研究基金

(http://www.nonprofitresearch.org)

OMBウォッチ

(http://www.ombwatch.org)

## 2001年度研究助成申請状況

本年度も4月1日から5月20日かけて研究助成の公募を行った。昨年度、研究助成開始以来はじめて1,000件を超える申請があったが、今年度は、さらに75件増え1,091件の申請があった。各種別、課題の申請数は、表のとおり。研究助成A（個人研究）の領域では、昨年度より92件増え630件と多数の申請があった。一方、研究助成B（共同研究）の領域では、昨年度より17件減って、461件とあまり大きな変化がない。

98年度からWEBサイトより申請書がダウンロードできるようになったが、4年目を迎えた今年は、ダウンロードにより入手した申請書が大方を占めるようになった。またそれに伴い、郵便での資料請求は733通と、98年度に比べ、およそ1/5に減った。

●申請者国籍

外国人からの申請は、97年から昨年度まで、23%と全く変らぬ比率であったが、今年度は、4ポイント増えて、27%であった。国籍別では、昨年と変らず中国が一番多く50件、次いで韓国46件、アメリカ26件であった。特筆すべきは、アフリカの人からの申請が23件と昨年より12件も増えたことである。インターネットの普及により世界中の国から情報へアクセスできることになったことが、大きな要因であろう。それに伴い英語による申請が7ポイント増え22%であった。

●その他

女性からの申請は、研究助成Bでは、昨年度より2ポイント増えて18%。研究助成Aは、かねてから女性が占める比率が高いが、今年度は、昨年度より6ポイント増え、42%とおよそ半数を占める数となった。

平均申請額については、研究助成Aでは、昨年と変らず、163万円。一方、研究助成Bは、52万円増えて778万円であった。2,000万円前後の申請も数件あり、全体として非常に高額な申請が目立った。昨年度、選考委員会から「申請金額が多い案件の中には、積算が雑で具体性に欠けるものが多かった」との評があったが、この点、今年の申請に対して、選考委員会でどういった意見がでるか興味がある。

今後は、各選考委員会による評価作業が行われ、9月末の理事会で最終的な助成対象が決定する。（喜田記）

| 全体合計 | 研究助成A | 研究助成B | | | | B計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 課題1 | 課題2 | 課題3 | 課題4 | |
| 1,091 | 630 | 150 | 127 | 127 | 57 | 461 |

課題1　多様な文化の相互作用：グローバル、リージョナル、ローカル
課題2　社会システムの改革：市民社会の発展をめざして
課題3　これからの地球環境と人間生存の可能性
課題4　市民社会の時代の科学・技術

## モンゴルの環境大臣が財団訪問

6月5日(火)、来日中のモンゴル自然環境省のバースボルト大臣が財団を訪問され、11時より１時間にわたって黒川常務理事他、財団スタッフと意見交換を行った。

首都ウランバートルでは現在、大気汚染が問題となり、その原因のひとつが車の排出ガス、もうひとつが周辺部の家庭で暖房用に燃やされる石炭に由来するものという。この大気汚染問題に対する財団からの援助の可能性を探るというのが今回の訪問の目的であった。

自動車の排ガス制御の技術的な面は、財団よりはむしろトヨタ自動車に直接打診することをお勧めし、財団の可能性として「研究助成」と「グローバル500賞記念環境プログラム」の2つについて紹介した。その結果、特に後者には強い関心を示され、昨年度の助成対象のひとつ、タイにおける地域住民の資源管理能力向上プロジェクトはまさにモンゴルにも当てはまるとのコメント。地域住民が、燃料用やあるいは家屋の塀などの付加価値の低い目的に伐採を行うため急速な森林破壊が進んでいることも、大気汚染とならんでモンゴルの抱える大きな環境問題であるという。

大臣は帰国後、トヨタ財団の助成に挑戦してみるよう、研究者、NGOなどに積極的に働きかけるとのこと。財団としてもぜひ魅力的なプロジェクトの応募があることを期待したい。

中央がモンゴル国自然環境環境大臣

## 新刊紹介

### 在日韓国人の終焉

鄭大均著
文芸春秋社（文春文庫）
2001年4.20刊　A6判　198頁　\660
ISBN4-16-6610168-7

本書を著した鄭大均さんがトヨタ財団の助成を受けたのは、1991年のことである。その折の申請書を読みなおしてみると、鄭さんのキャリアは学者としてはとても変則的なものである。大学を卒業されたのは20代の半ばになってから、また、米国でエスニック研究の修士号をとった後に、韓国に渡り、地方のいくつかの大学で日本語教育の教鞭をとっている。申請した段階では、韓国大邱市の啓明大学校日本学科の助教授を務めていた。学界の主流にいる研究者でこのような経歴の人は稀だろう。

本書で用いられている方法論は、いくつもの手記や著作の一部を引用して、それにさまざまな解釈を加えるという、ごく普通のものである。社会学やマスコミュニケーション論を学んだ学生なら学部の卒業論文でも使いこなす。しかし、引用の中にこめられた意味を読み解き、そこからさまざまな人間の物語を紡ぎだすまなざしと語り口には鮮やかなものがある。米国と韓国を渡り歩くうちに積み重ねた人との出会いと自らへの問いかけなしには、このようなまなざしも語り口も培われることはなかったろう。これは、学位や業績といった学界の約束事にこだわらずに、長い時間を費やして醸した手作りの学問である。そして自分の学問を作るための放浪と模索を支えたのは、鄭さん自身がどのように生きたらよいのかという問いだったと思う。

おそらく本書の内容は論争を呼ぶはずである。鄭さんの見方の後ろに、その生身の個人の歴史があるように、異なった風土と歴史の中で育った人には異なる見方があり、それに基づいた別の議論があるに違いない。多様な個人史を持つ在日の人々が、生きたいように生きていける多様な道筋を作り出すうえで、本書を巡る論争が役立つことを願う。(S.H.)

### 日本占領下の英領マラヤ・シンガポール

明石陽至編
岩波書店
2001年3.26刊　菊判　364頁　\6,800
ISBN4-00-024201-6

1941年12月8日の真珠湾攻撃開始より1時間半前に、日本軍はマレー半島北東部クランタン州コタ・バルに上陸作戦を敢行し、翌年2月15日に英軍は降伏。以後45年の敗戦まで、シンガポール、マレー半島全域は3年8ヵ月におよぶ日本の軍政下におかれ、人々は強制労働、拷問、陵辱、暴力等の様々の苦難を味わった。

本書は、この日本占領について、日本軍が実際に行った軍政の内容、そしてそれが影響を及ぼしたその地域の経済の実態および人々の生活や苦難を明らかにしている。

本書の執筆者は、1994年から当財団の計画助成を受けて組織された「日本の英領マラヤ・シンガポール占領期フォーラム」のメンバーが中心となっている。同フォーラムは、マラヤ・シンガポールの日本占領期研究に不可欠の日本側・連合国側の史・資料を発掘、収集するとともに、日本人関係者にインタビュー調査を行いその記録の刊行を行った。

本書は、そうした活動で得た史・資料や、最近解禁された諸外国の一次史料も取り入れて、従来の政治・人種中心の研究に、初代総務部長渡邊渡の軍政哲学とその施行について、また、経済政策とその実態、敵性女性抑留者の生活実態、そして鉄道の役割などへと研究領域を拡大して、日本軍政とその地域社会の実態について実証的研究を行っている。さらに本書では、それらが戦後に与えた影響、そして当時から現在に至るまで人々が日本軍政をどのように感じ認識していたかについても考察している。本書は、1999年度の成果発表助成を受けて出版された。(Y.H.)

## 訃報

1998年および1999年にSEASREPの選考委員長を務めてくださったマレーシア国民大学（ＵＫＭ）マレーシア・国際研究所（IKMAS）所長のイシャック・シャリ教授が6月30日に急逝された。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## トヨタ財団人事

【採用】
石井　恵子（いしい　けいこ）
7月1日付けにて当財団の新メンバーになりました。主に市民社会プログラムのサポート業務を担当します。国際交流基金日米センターでの経験に期待します。

トヨタ財団レポート　No.96

このレポートを継続してご希望の方、また住所等の変更がございましたらお葉書にて財団までお知らせ下さい。

発行日　2001年7月15日
発行所　財団法人　トヨタ財団
発行人　黒川千万喜
編集人　本多　史朗
印　刷　真友工芸株式会社